

インドネシアにおける地域環境教育プログラムの創出 ～「森の聞き書き」手法を活かして～

一般社団法人あいあいネット
島上宗子

1. 事業の背景と目的

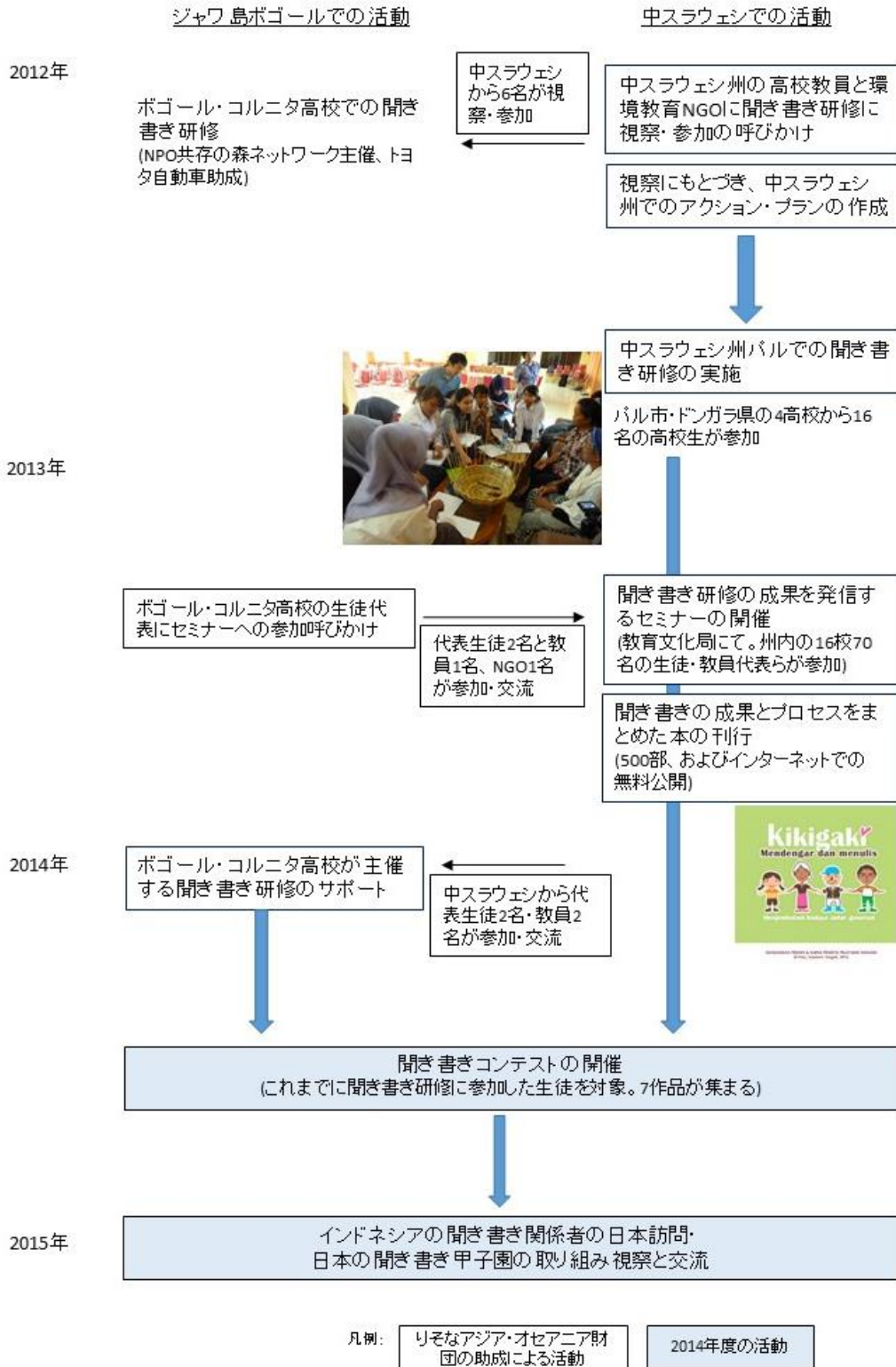
本事業は、日本で高校生を対象に実践されてきた「森の聞き書き甲子園」の経験と手法を題材として、地域の固有性と実情にねざした環境教育プログラムがインドネシアで自立的・発展的に実践されることを目的とした。

「あいあいネット」では、これまで 2 年間にわたり、りそなアジア・オセアニア財団の環境プロジェクト助成をうけ、「聞き書き」手法を活かした環境教育プログラムの創出を、インドネシアの中スラウェシ州とボゴールを主たる対象地域として試みてきた。一年目(2012 年度)の助成では、日本で「森の聞き書き甲子園」を実施してきた NPO 共存の森ネットワークと連携し、ジャワ島ボゴールのコルニタ高校で実施された「聞き書き」研修に、中スラウェシの高校教員と NGO 関係者 6 名が参加を促し、中スラウェシでの展開の可能性を話し合うワークショップを開催した。その結果、研修とワークショップに参加した 6 名が中心となる形で、中スラウェシ州パル市およびドンガラ県の 4 校 16 名の高校生を対象とした「聞き書き研修」の実施へといたった。一年目の活動成果を受け、二年目(2013 年度)には、聞き書き研修に参加した高校生の聞き書き作品と研修のプロセスをまとめた本”Kikigaki: Mendengar dan Menulis----Menjembatani Budaya antar Generasi” (聞き書き----世代を越えて文化をつなぐ)を発行した。また、「聞き書き」の成果発表と今後の展開を議論するセミナーを中スラウェシ州教育文化局の講堂にて開催し、中スラウェシ州の計 16 校から教員・生徒代表、地方政府・NGO 関係者、ボゴールのコルニタ高校の生徒・教員など計 100 名弱が参加した。

以上の活動を踏まえ、三年目となる 2014 年度は、NPO 共存の森ネットワークとの連携の下、「聞き書き」手法を活かした環境教育プログラムがインドネシアで自立的・発展的に展開される道筋をつけることを目指した。具体的には、インドネシアの聞き書き関係者(中スラウェシ州政府関係者、学校関係者など)を日本に招へいし、日本の「聞き書き甲子園」の取り組みと経験を視察することで、日本・インドネシアの関係者が、「聞き書き」手法を活かした地域環境教育プログラムの可能性を議論し、インドネシアにおける自立的・発展的な展開のビジョンを共有することをめざした。

これまでの活動の流れは図 1 のように整理できる。□はりそなアジア・オセアニア財団の環境助成をうけての活動であり、今年度の活動は、そのうちブルーに色づけた部分である。

図1 「聞き書き」手法を活かした環境教育プログラム創出にむけたこれまでの取組み



2. 事業の実施概要

2014 年度は、① インドネシアでこれまでに聞き書き研修に参加した高校生による「聞き書き作品コンテスト」の実施、② インドネシアの事業関係者（聞き書き作品コンテストの優秀賞受賞生徒、関係高校教員、NGO 関係者）による日本の「聞き書き甲子園」の取り組みの視察と交流、を実施した。

当初、中スラウェシ州教育文化局関係者が、州政府の予算により日本の視察に参加予定であったが、教育文化局局長の異動などから、延期となった。そのため、聞き書きコンテスト実施を通じたボゴールと中スラウェシの連携、日本視察を通じた日本とインドネシアの連携に重点をおき、事業を進めた。

2-1. 「聞き書き」コンテストの実施

過去 2 年間に、ボゴールと中スラウェシで実施した「聞き書き研修」に参加した生徒を対象として、「聞き書き作品コンテスト」を実施した。計 7 作品の応募があった。中スラウェシの研修参加生徒の多くがすでに高校を卒業していたことから、ボゴールのコレニタ高校からの作品が大部分をしめた。審査員は、コレニタ高校校長、ボゴール農科大学教員、愛媛大学教員、中スラウェシ NGO コーディネーターらからなる 6 名が担い、応募作品を評価した。評価に際しては、作品の「内容」と「フォーマット」の二つに注目し、以下のポイントを考慮しながら、それぞれ 5 点、計 10 点満点で評価した。

聞き書き作品・評価のポイント

<p>【作品の内容について】</p> <p>A1: 名人(話し手)の言葉をよく聞き取れている</p> <p>A2: 名人の仕事や技がきちんと記述されている</p> <p>A3: 名人の人となり、人生観が伝えている</p> <p>A4: 名人を取り巻く背景や情景(社会状況、家族関係、生活環境など)を伝えている</p>	<p>【作品のフォーマットについて】</p> <p>B1: 聞き書きの手法に即している(名人の言葉のみで構成する)</p> <p>B2: タイトルや見出しがうまくつけられている</p> <p>B3: 写真・絵が効果的に使われている</p> <p>B4: 現地語が効果的に使われ、説明されている</p> <p>B5: 「名人のプロフィール」が付されている</p> <p>B6: 「聞き手の感想」が付されている</p>
--	---

聞き書きコンテスト参加作品と参加生徒

順位	作品名	生徒名	高校名
I	Tukang Ojeg Sepeda Ontel (自転車タクシーのおじいさん)	Hendi Tanias	コレニタ高校
II	Mandat Untuk Membuat Bedog (ブドック鎌を作る使命)	Denny Bimantara	コレニタ高校
III	Musuh Si Sakit(敵は病)	Fatima Takeda	コレニタ高校
IV	Wanita Tangguh Penjual Kue Traditional (伝統菓子を売る、逞しい女性)	Diah Rizky Alysa Shinta / Shella Princellya	コレニタ高校
V	Tenun Ikat Sarung Donggala dan Prospek Pengembangannya (ドンガラ絨とその将来)	Widya Ika Putri	ドンガラ第一高校

VI	Kacang dan Kayu Menghidupiku (落花生と木が暮らしを支えてくれた)	Anjani Eka Lestari / Sri Yanti Astitui Marbun	コルニタ高校
VII	Mengamati, Mengajar, Membuat, sampai mendatangkan rezeki (幸運が来るまで観察し、教え、作る)	Riska Amalia	コルニタ高校

2-2. インドネシア関係者による日本の「聞き書き甲子園」視察・交流

聞き書きコンテストで評価の高かった上位 2 名の生徒、生徒が所属するコルニタ高校の教員、および中スラウェシで聞き書き研修実施のコーディネーターを担っている NGO 関係者の 4 名を日本に招へいした。日本の「聞き書き甲子園」参加生徒 100 名が一堂に会する「聞き書きフォーラム」の時期に合わせて招へいし、フォーラムで視察と交流を図った。

インドネシアからの聞き書き招へいメンバー

	氏名	所属
1	ヘンディ・タニラス	ボゴール・コルニタ高校 2 年生
2.	デニー・ビマンタラ	ボゴール・コルニタ高校 3 年生
3	イルマ・シルヴィアンティ	ボゴール・コルニタ高校教員
4	エウイン・ラウジェン	中スラウェシ・NGO コーディネーター

来日中は、下記の活動を行った。日本側では、「聞き書き甲子園」の事務局である NPO 共存の森ネットワークの事務局長・吉野奈保子さんとあいあいネット・島上がほぼ全行程を同行し、日本の聞き書き甲子園の展開状況を伝えた。「聞き書きフォーラム」では、インドネシアからの高校生 2 名がそれぞれの聞き書きの成果と体験を英語・日本語で発表した。また、聞き書き甲子園参加の日本人高校生らとともに、夢の島で日本のゴミ処理の歴史と現状を学び、夢の島で植樹活動を行った。

フォーラム参加後は、愛媛県を訪ね、「聞き書き甲子園」に生徒を送っている上浮穴高校と愛媛大学附属高校で高校生同士の交流をはかった。愛媛県の山間部に位置する上浮穴高校訪問では、上浮穴に伝わる和太鼓を体験した他、民泊を通じて、日本の山村の暮らし・文化と現状を学ぶ機会を設けた。

来日中の日程

		主な活動	宿泊場所
3 月 26 日	木	21 : 35 ジャカルタ発 (NH856)	機内
3 月 27 日	金	7:00 羽田着(島上、岩井空港迎え) 日本滞在に関するオリエンテーションと打ち合わせ 自由時間(浅草散策)	京急 EX イン 浅草橋駅前
3 月 28 日	土	午前: 発表準備、東京大学訪問 午後: 「聞き書き」フォーラムに参加(於: 東京大学弥生講堂ホール) 夜: 聞き書きワークショップに参加。日本の聞き書き参加高校生との交流	東京スポーツ文化館

3月29日	日	午前：夢の島での植樹活動に参加 17:10 羽田→18:45 松山(NH595)	愛媛大学職員会館
3月30日	月	9時、松山出発 10:30 愛媛県上浮穴高校での交流 石窯ピザづくり、和太鼓体験、聞き書き交流 17:00 秋本家にて民泊体験	上浮穴・秋本先生宅
3月31日	火	8:00 上浮穴、山村散策。餅つき体験 14:00 秋本家出発 15:30 松山着	愛媛大学職員会館
4月1日	水	午前：振り返りと活動計画に関する話し合い 13:00- 愛媛大学付属高校との交流	愛媛大学職員会館
4月2日	木	松山散策 17:15 松山→ 18:40 羽田(NH596)	羽田空港フォーストキ ャビン
4月3日	金	10:05 羽田空港発→15:40 ジャカルタ着(NH855)	

3. 事業の成果と今後の展望

以上のように、本事業は、中スラウェシとボゴールの二つを拠点として、それぞれの特性を活かし、補い合う形でインドネシアにおける「聞き書き」手法を活かした地域環境教育プログラムの創出をめざしてきた。今年度の事業を通じて、以下のような成果と今後にむけた基盤をうみだすことができた。

- ① 聞き書きコンテストの審査員として、コルニタ高校の校長、ボゴール農業大学の教員、中スラウェシ・パルを拠点とする NGO コーディネーター、日本環境教育フォーラム・インドネシア駐在員、愛媛大学のインドネシア人教員らの協力を得ることができた。審査のプロセスで、「聞き書き」に関する共通認識を深め、今後のインドネシアにおける連携の基盤を強めることができた。
- ② インドネシアの聞き書き関係者が日本で 13 年間続いてきた「聞き書き甲子園」のビジョン、産・官・学・NPO が連携した実施体制、生徒・学生が主体的に関わる工夫や仕組みについて視察し、インドネシアでの仕組み作りに関して、より具体的なイメージを共有し、議論した。
- ③ 日本の「聞き書き甲子園」に参加した高校生 100 名とインドネシアからの高校生が互いの取り組みと経験を発表しあい、刺激を与え合った。「聞き書き」という経験の共有を通じ、日本とインドネシアの高校生が両国の農山漁村の状況について学ぶ機会となった。
- ④ 愛媛県の上浮穴高校と愛媛大学附属高校の訪問を通じて、コルニタ高校との恒常的な交流の可能性が議論された。
- ⑤ 愛媛大学、愛媛大学附属高校、ボゴール農業大学、ボゴール農業大学附属コルニタ高校の間で、聞き書きを軸にした日・イの高校・大学連携と交流の可能性が議論された。

今年度までの活動をふまえ、NPO 共存の森ネットワークは、日本の「聞き書き甲子園」とインドネシアの聞き書き研修・聞き書きコンテストの実施をリンクさせる取り組みを

2015 年度に試みる方向で準備を開始した。2015 年度は、NPO 共存の森ネットワークの取り組みをサポートする形で、インドネシアでの展開を進めることとしたい。

今年度予定していた中スラウェシ州教育文化局関係者による日本視察が延期となったことで、中スラウェシ州での自立的・発展的展開については、再度、州政府、関係高校などと議論を深めていく必要がある。2015 年度は、NPO 共存の森ネットワークの取り組みをサポートする中で、そのための具体的な計画を検討していく予定である。

【写真集】



日本の「聞き書き甲子園」参加高校生の前でインドネシアでの聞き書きの成果・経験発表
(2015年3月28日、東京スポーツ文化館にて)



日本の高校生とともに、聞き書きの経験を振り返るワークショップ
(2015年3月28日、東京スポーツ文化館にて)



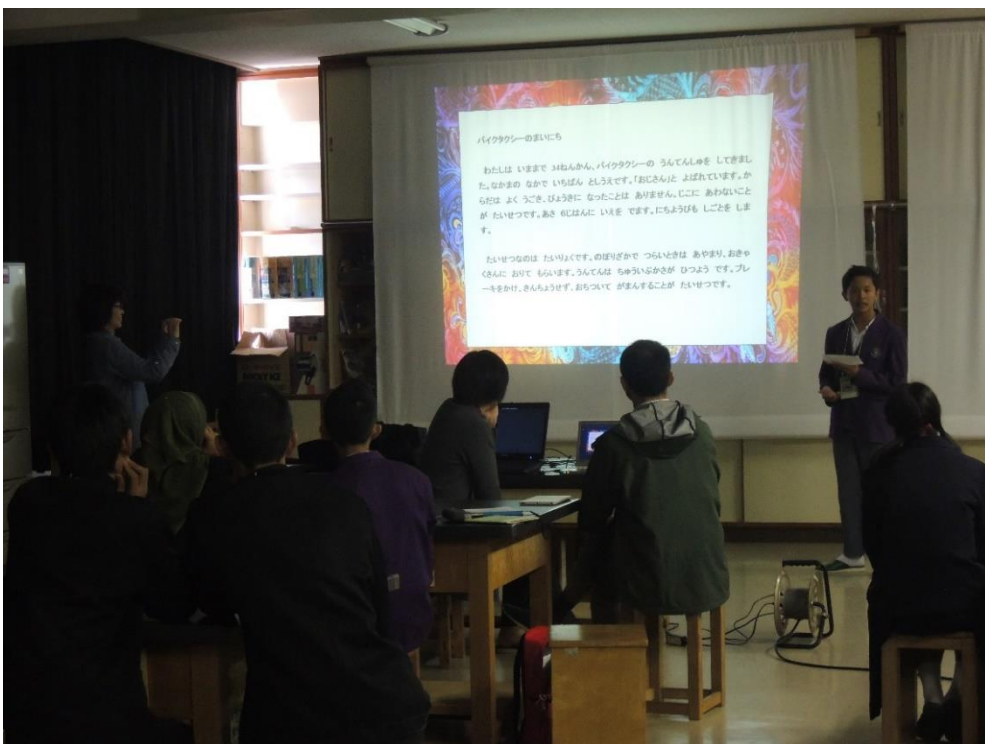
聞き書きの経験を振り返るワークショップ（2015年3月29日）



聞き書き甲子園の参加者らとともに、記念の植樹活動
(2015年3月29日、夢の島にて)



愛媛県の山間部に位置する県立上浮穴高校での交流
(2015年3月30日)



愛媛県立上浮穴高校での交流
(2015年3月30日)



愛媛県立上浮穴高校での交流
(2015年3月30日)



地域の伝統を学ぶ。上浮穴にて民泊を体験し、暮らしを学ぶ
(2015年3月30-31日)



愛媛大学附属高校、愛媛大学学生との交流。
インドネシアの伝統的竹楽器アングルンを共に演奏する
(2015年4月1日)